

BOOK Review

外来・病棟・地域をつなぐ ケア移行実践ガイド



評者

筒泉 貴彦 愛仁会高槻病院総合内科主任部長

「筒泉先生、米国ではケア移行 (Transition of Care) はやっぱりすごいですか？」

これは私が練馬光が丘病院で勤務している際に本書の編者である小坂鎮太郎先生よりいただいた質問である。

米国で内科レジデントとしてのトレーニングを受けたが、ケア移行という単語は恥ずかしながらそれほどなじみ深い単語でなかった。しかし先輩である手前、「そ、そらそやろ」ととっさに返答して、すぐに得意のコソ勉でケア移行について猛勉強したことを今も覚えている。タイミングよく『Annals of Internal Medicine』という雑誌内の有名コーナーである「In the clinic」でケア移行の特集があったため熟読したが、そこで強調されている内容が当時の内科レジデントにおけるトレーニングに十二分に組み込まれていることを知った際は大変驚いた。やはり米国の実践的教育はシステムティックにできていることをあらためて感じた次第である。

私自身が米国で経験したケア移行にかかわる入院診療、申し送り、コードステータスを含めたアドバンスケアプランニングなどについて小坂先生を含めた若手医師にでき得る限り伝えたつもりだが、それをいかに日本の診療に落とし込むか、ということが課題であった。どうしても日本の医療システムや文化、保険診療などにおいて米国との違いがあるため簡単にコピーアンドペーストできる内容ではないためである。一方で、わが国におい

てケア移行の必要性は切実な問題となっていることもまた事実である。かかりつけ医制度が米国と比べると厳しく規制されておらず、多くの患者が基礎疾患はもとより老年症候群やフレイルの影響で再入院を繰り返しているのは全国的な問題となっている。

本書は私が米国で学んだ入院診療における断片的なケア移行を外来や地域にまで広げつつ、かつ日本においては汎用性の高いものに昇華させた素晴らしい実践書となっている。ケア移行はいろいろな場面において起こる。院内の転棟や退院時だけではなく、外来への申し送りや地域ぐるみの対応を行うときにも必要となる。その際に多くの職種の方および患者家族との良好なコミュニケーションが必要となる。想定し得る状況ごとにエビデンスを多分に含めた丁寧な実践的な記載であるため、今日からでも目の前の患者に適用できる。執筆陣も若手医師を多く登用している。経験がまだ少ないと侮ってはいけない。彼ら彼女らはまさに現場の患者を目の前にして日々鍛錬を積み重ねている現場第一のスペシャリストである。私のたどたどしいケア移行の教育が有望な後輩たちにより熟成され、本書の完成となったことを大変うれしく思う。次の世代である読者の皆さまが本書から質の高いケア移行を学び、それが日本全国におけるスタンダードとなるほど浸透していくことを切に望む。

小坂 鎮太郎, 松村 真司 編

B5/184頁/2022年/定価3,850円(本体3,500円+税10%) / ISBN978-4-260-04885-9 / 医学書院刊